

第一室 第二詩 慈悲

天使たちは、戦さで困惑しているに違いない。
どちらの側も加護を祈っている
しかし、いつも誰かが傷つく。

誰かが命を落とす。

誰かが、深く悲しみ

その涙に濡れた国を失う。

天使たちは、戦さで困惑しているに違いない。

誰を助ければよいのか？

誰を清めなくてはならないのか？

誰の慈悲が、誰の無慈悲に捧げられるのか？

人知れぬ叫び声は聴かれることはなく

染みのない痛みは感じられることはない。

すべては天使たちにとって明白だ

戦さを除いては。

この真実に私が目覚めたのは

昨晚、自分が見た夢からだった。

戦場で二人の天使が会話しているのを見た

子供たちの魂スピリットが

銀の煙のように立ち昇る戦場で。

天使たちは互いに言い争っていた

どちらの側が正しく

どちらが間違っていたのか

誰が戦さを始めたのか？

突然、天使たちは静かになった

失速した振り子のように

そして彼らは慈悲を垂れた

その煙に向かつて

戦さの水 紋を負った魂ソウルたちへ。

彼らはその瞳を私へと向けた

神の図書館から。

そして、落ちていたすべての破片たちが

合一ユニオンの中へと上昇する

聖なる炉の中の炎の息のように

結合しながら。

戦さによって何ものも破壊されない
分離という幻想を除いては。

私には、その声はつきりと聴こえた。

偽りの署名のように、それを書き留めることしかできなかった。

その慈悲を私は思い出している

宇宙に対する巨大な山脈のような調和を。

自分には、まだその小さな痕が付いているように感じる

蜘蛛の巣から放たれた

浮遊する糸の痕跡のようなものを。

そして今、戦さについて思うとき

宇宙全体に向かって私はその糸を放り投げた

その糸が誰かに触れることを願って

自分がその糸に触れられたように。

慈悲というフィラメントの恩寵を紡ぐため

天使と動物たちを縫い繋いでいる。

私たちの空の家には、そのフィラメントの網が広がっている。